

ニュー・ヨーク日本人学校児童・生徒の 国際性に関する調査研究

Research on the Internationality of Students of the Japanese School of
New York

田 浦 加津子 (Taura, Kazuko)

In the coming global era, in order for Japan to naturally take on a vital role in the symbiosis of the human cultural family, *internationalization* will be of vital importance. On an individual level, internationalization will require a capacity for *internationality* which can be defined as a competence and attitude for internationalization. In seeking to acquire concrete data concerning the problems of internationality, research was carried out at the Japanese School of New York, with an emphasis on the daily realities of life for the children studying there.

序 章

日本がこれからの世界で重要な役割を果たすためには、国際化することが重要な課題の一つである。そのためには、わが国民の考え方の現実を捉え、その長所やよい伝統を生かし、その短所と問題点を克服していくことが必要である。このことは、将来の日本を担う子どもたちにとっても、人間形成上の大きな課題である。

日本人の特徴と課題についての注目すべき主張として、E. O. ライシャワー (Edwin O. Reischauer) の見解がある。ライシャワーは、日本史および日本文化研究のアメリカの代表的学者であり、ハーバード大学教授として活躍したが、1990年、80歳の生涯を閉じた。彼は、『日本の国際化——ライシャワーとの対話』¹⁾で、日本の国際化の問題について、多くの示唆を与えているが、特に次の二つの主張、すなわち、(1) 日本人の特徴について、(2) 国際化のために必要なこと、についての主張が、私の注意をひいた。

次にそれぞれの要点を述べてみたい。

(1) 日本人の特徴について

- ① 自分たちはユニークで特別な存在であるという気持ちが強い。
- ② 集団志向性と総意による裁定を好む傾向がある。
- ③ 世界の政治・経済活動に参加しないという傾向がある。
- ④ 美的感覚にすぐれている。これは直観的理解を尊重する手法と関係している。
- ⑤ 多様性を尊重し、互いの違いを認めあい、そこから一致点を探す努力をするのに 慣

れていない²⁾。

このように、ライシャワーは、日本人の特徴について述べている。これら五つのうち、④以外は、日本人の国際性すなわち国際化が必要とする能力・価値観・態度を考えるうえで、重要な批判や忠告といえることができる。

①に関していえば、異質な文化や人間に対する寛容さを、日本人は十分に持っていないことを反省させられる。

②に関していえば、日本人は、個を重視せず、主体的な自己主張を欠いていることを反省させられる。

③に関していえば、自国中心の閉鎖性を検討し、人類の平和に積極的に貢献する働きが必要であることを教えられる。

⑤に関していえば、①とも関連しているが、人間や民族の多様性を認め、考え方の違いから対立と緊張を生むのではなく、それらを克服し、人類の共生の理想とその達成の努力をする必要があることを教えられる。

(2) 国際化のために必要なこと

① 国際化のためには、意見を表明し、相手を説得するコミュニケーションのルールを身につける必要がある³⁾。

② 世界の生存のために日本がなすべきことを学ばなければならない。世界の相互依存の深さを学び、世界の多様性を「人間の目」で知ることが重要である。それには世界を丸ごと自然に呼吸してきた帰国子女の経験が、かけがえのない価値をもっている⁴⁾。

ライシャワーが指摘するように、海外で生活した子どもたちの経験をいかに生かし育てるかは、日本の将来の国際化を大きく左右するものといえることができる。

このようなライシャワーの二つの主張は、私が、海外で生活している日本の子どもたちがどのような国際性を身につけているかを、調べたいと思うきっかけを与えてくれた。特に、調査の理論的フレームワークを考える場合、一つの重要な示唆を与えてくれたように思う。すなわち、自国文化の長所を理解し、他国の文化に建設的に接し、両者に一定の距離を保ちながら、両者の長短を客観的に省察し、国際化が必要とする能力・価値観・態度、いいかえれば、自分とは異質な文化や民族と共存し共生していくことができる能力や価値観や態度を育成することが大切である。

実証的に、ニューヨークの日本人学校の児童・生徒の国際性についての検討を行い、国際性の育成についての展望を得たいと考えた。

この場合、とくにアメリカのケースについて検討したが、その理由は次の点にある。

1. 第2次大戦後、アメリカと日本との交流が、他の国と日本との交流に比べて広くかつ緊密であること。
2. 海外勤務者及びその子どもの数が他の国に比べて多いこと。
3. 日本人学校は、アメリカと日本との双方の学校制度の条件をみたすものであったこと。またアメリカの日本人学校は、ニューヨーク、シカゴ、グアムの3カ所にあるが、今回は調査

対象校の都合上、ニューヨークのケースを主としてとりあげることにした。

何といっても現在の子どもたちは、日本の国際化の担い手である。内と外とを峻別し、画一性・同質性を好み、異なった思考様式や異質の文化に対して、排他的な傾向をもちがちな古い世代と異なり、海外での生活を通して、丸ごと国際社会の中での生活体験をもっている子どもたちの場合は、特に日本の国際化のために、彼らの生活体験を大切にし、いかにそれを育てていくかの課題を明らかにする必要がある⁵⁾。

第Ⅰ章 日本人学校をめぐる教育環境

教育環境とは、文化的・自然的環境の人間形成的側面に注目した概念であるが、私の研究しようとする日本人学校は、1970年代、その創設に当たって、アメリカの教育制度と日本の教育制度との両方の法的規定を充足することが要求されたので、教育学者 加藤幸次（当時、国立教育研究所所員）を初めとする関係者の多くの努力が必要であった。

アメリカの学校では、国民としてのアイデンティティを確保するためには、アメリカの歴史や社会についての学習を要求している。アメリカ国民としてのアイデンティティの確保という要求の背後には、特色あるアメリカの教育状況や教育環境があると考えられる。

次にこの点を分析してみよう。

アメリカの教育状況や教育環境の特質についての論議のうち、体系的な理論を展開したのは、L. A. クレミン (Lawrence A. Cremin) である。彼はコロンビア大学教育史教授として活躍した。彼は1975年の論文で、アメリカ教育を特色づける枠組みとして、(1) 多様性 (diversity)、(2) 包括性 (comprehensiveness)、(3) 公共性 (publicness)、(4) 普遍性 (universality) の4つを挙げている⁶⁾。

次にこれらの中、日本人学校の問題に特に関わる特質、特に多様性、公共性について、簡潔にふれたい。

(1) 多様性 アメリカの国土は、日本の25倍にあたる937万平方キロの広い面積であり、多くの人種が集まっており、合衆国という国家構成をとっていること等は多様性を生み出す要素である。アメリカでは教育行政の権限は、連邦政府ではなく、州にある。

1979年に、従来の保健・教育・厚生省を改組し、連邦教育省が別に設けられたが、連邦教育省は、教育行政のサービス機関の色彩が強く、日本の文部省のように、学校制度や教育内容まで、立ち入って規制する法的権限をもっていない。

以上のような状況から、アメリカで日本人学校を設立しようとする場合、国の政府同士の交渉では成り立たず、州の教育当局と交渉する必要があるが生じてくる。

アメリカでは地域住民や地域の人々の意向によって学校体系を選ぶことができるので、ニューヨークの日本人学校の場合、日本と同じように、6-3-3制を選択することが可能であった。

(2) 公共性 多くの国で、学校教育は、中央政府の統御のもとにおかれており、公共性は、

各国の教育制度に共通した特色であるといえる。アメリカの場合、中央政府よりも州に教育の権限がある。それを端的に示すのは、教育委員会制度におけるレイマン・コントロール (layman control) の考え方である。レイマン・コントロールというのは、行政の専門家ではない人が、地域社会の住民を代表し教育委員会を構成し、政策を決定することを意味している。また公教育の経費の大部分は住民の負担である。住民は教育税を払って地域社会の学校を財政的に支持している。教育税は主として不動産税や消費税を財源としている。

日本人の子どもたちが、アメリカの公立学校に多量に入学した場合、地域の公教育費をそれだけ費やすわけであり、日本のような「富裕な」国民の子どもたちに、どこまで公費を負担してよいかについては、むしろ批判的な地域社会も存在していることは事実である。そこで地域によっては、日本人学校を自前で設立せざるを得ないことになってきた。ニューヨークやシカゴの日本人学校設立の要因の一つもここにあったといつてよい。

現地校に通う子どもたちは、英語の力を身につけることはできるが、日本語を忘れてしまうという事態が起こってくる。そこで日本に帰った時、日本語を話せなくては困ることを深刻に考える親たちの中には、日本人学校や日本語補習授業校⁷⁾に行くことを期待するようになってくる。ニュージャージー州にいる日本の子どもも、ニューヨークの日本人学校や日本語補習授業校に通う者が相当数いるのも、このような事情からである。

第Ⅱ章 ニュー・ヨーク日本人学校の教育状況

Ⅱ-1 ニュー・ヨーク日本人学校の設立と環境

Ⅱ-1-1 ニュー・ヨーク日本人学校の設立

ニュー・ヨーク日本人学校は、現在コネチカット州グリニッチ (Greenwich) 町にあるが、ここに至るまでには若干の変遷がみられる。同校の開校20周年記念の略史をみると、学校の展開の時期を次のように4期(草創期、発展期、過渡期、飛躍期)に分けている⁸⁾。

それぞれの教育状況を当時の教師たちの話などから簡潔にまとめてみよう。

(1) 草創期 クインズ・ジャマイカ校時代 (1975.9.2~1980.12.21)

この学校は、普通の住宅といった感じで校庭はなく、体育館は地下にある小さいもので、体育はかなり離れた公園に行くしまつであったという。しかし新しく学校を始めるのだという意欲は高かった。校内弁論大会で、ある生徒が「運動場がほしい」というテーマで発表したのが、保護者たちを動かして、クインズのフレッシュ・ミッドヴズへの移転のきっかけになったということである。

(2) 発展期 クインズ・フレッシュ・ミッドヴズ校時代 (1980.12.22~1991.6.30)

生徒数が500人位になった時期で、以前より、学校は広くなったが、グラウンドが狭かった。しかしバスケットコートが周辺にかなりあったので生徒は大喜び、女子の生徒会長や応援団長も活躍し、男女組み合った騎馬戦も行なつたと記されている。

(3) 過渡期 ヨンカーズ校時代 (1991.7.1~1992.8.23)

1991年6月にクインズ校の賃貸期限が満了することと、移転の決まったグリニッチ校の改築修理の完了予定が92年8月ということで、その間の1年間、当時使用されていなかったヨンカーズ校を修理して使用することになった。体育館、音楽室、講堂もあり、教室も数的に恵まれていた。カフェテリアも広く、子どもたちが喜んで走り回る場所ともなったという。

(4) 飛躍期 グリニッチ校時代 (1992.8.24～現在)

ニュージャージー分校 (1992.4.9～現在)

グリニッチ校への移転計画は、1987年から始まっており、資金も多額を要した。周辺地域の人々からは、景観が悪くなるとか、キャンパスの街灯が明るすぎるとか色々注文や文句が出て、苦勞したといわれている。文化の違いを見せつけられたという。グリニッチ校の設備も環境も自然も抜群だということを、当時の児童会長が述べているのが印象的である。そこで節をあらためて現在のグリニッチ校の環境について述べ、次節で教育方針、教育課程について検討したい。

Ⅱ-1-2 ニュー・ヨーク日本人学校の環境

1992年8月から、ニュー・ヨーク日本人学校は、コネチカット州のグリニッチ町へ移っている。賃貸の学校ではなく、自前の学校である。グリニッチ校は、ニューヨークのマンハッタンの都心から電車で約1時間半ほど離れた静かな森の中にある。

この地には、アメリカ人のための全寮制の私立学校があったが、それを購入して、日本人学校が移転してきた。約67,000㎡の広い敷地には、ニューイングランド地方の歴史が残る、石造りのチャペルがある。

施設概要は次のようになっている。

敷地面積	総敷地 66,774㎡	校舎面積 9,290㎡	運動場面積 13,935㎡
校舎構造	16の建物(鉄筋、石造り)、暖房(全館)、冷房(一部)		
教室数	普通教室15、特殊学級室2、理科室2、美術室2、音楽室2、技術室1、家庭科室1、体育館2、図書室1、放送室1、講堂1、英語教室3、コンピュータ室2		
特別教室数	教育相談室1、保健室1、児童・生徒会室1		
その他	校長室1、教員室10、事務室1、会議室2、ワープロ室1、印刷室1、教会1、多目的室1、PTA室1、元Greenwich校設立推進局室1、国際交流ディレクター室1		

これをみても施設が充実していることがわかる。

ニューヨークのこの学校には400名近くの子どもたちが、全員スクールバス（10路線）で通学してくる。これはグリニッチ町との申し合わせで交通渋滞を避けるためとされている。その中には、隣のニュージャージー州から、1時間以上もかけて通学している者もいる。

Ⅱ-2 ニュー・ヨーク日本人学校の教育方針と教育課程

Ⅱ-2-1 教育方針と教育目標

1. 教育方針

ニュー・ヨーク日本人学校の学校要覧（1995年度）によると、同校の教育状況を知ることができる⁹⁾。その概要を捉え、私のコメントを附加したい。

〔学校の性格〕

1. 本校はアメリカ合衆国で初めて日本人によって開設された学校であり、設置者は「ニューヨーク日本人教育審議会」である。
2. 本校は日本国政府の援助のもとにニューヨーク州とコネチカット州が認可した私立学校である。
3. 本校の教育内容は日本国の文部省とニューヨーク州とコネチカット州の認可条件による教育基準に基づいている。
4. 本校は日米双方の教師が日米二ヵ国語を通して両国文化の学習の指導にあたっている。
5. 本校は日米双方の学校に編入学でき、いずれの上級学校への進学も可能である。
6. 本校は初等部第4学年から中等部第3学年までをもって編成し、初等・中等一貫教育を実施している。

この記事のうち、6.「初等部第4学年から」となっていたが、1996年4月から1年生から3年生までをさらに入学させている。初等部第1学年から中等部第3学年までの編成が完結したわけである。ここに至るまでの関係者の努力は並々ならぬものがあつた。

次に同校の教育方針についてみてみよう。

〔教育方針〕

本校に学ぶ子女はこの地に住み、異なった民族や社会・文化の中で生活をし、その大部分は将来帰国することを予定している。従って、本校における教育はこの実態にたつて推進されなければならない。即ち日本の学校教育理念を基盤にしながら、現地の体験や教育的利点を有効に生かし、教育することが重要である。これによって育てられる望ましい人間像を求めて、本校の教育目標や教育基本姿勢等を設置した。

この教育方針は、国際化のための教育のあり方を示したものである。

2. 教育目標

次に、望ましい子ども像について、四つの教育目標を以下のように述べている。

(1) すすんで学習しよう

1. 学習のねらいがよくわかり意欲をもって自分で学習の方法を考えようとする子ども

2. 学習したことを、日常の生活のなかで実際に生かそうとする子ども
- (2) 思いやりの心を持つ
 1. 礼儀正しい態度を持ち、いきいきとした学校生活を送ろうとする子ども
 2. 一人ひとりを認め合い、助け合って共に高まろうとする子ども
- (3) 健康な体をつくろう
 1. 心と体をきたえようとする子ども
 2. 安全に心をくばり、体や命を大切にしようとする子ども
- (4) アメリカ社会を理解しよう
 1. アメリカの自然や社会・文化に関心を持つようとする子ども
 2. 英語に関心を持ち、積極的にアメリカに住む人々と交流し、アメリカ社会を理解しようとする子ども

教科、道徳、特別活動等で共通して、アメリカ社会の理解を深めようとし、また文化交流活動を特にかかげて、日本の文化と伝統を尊重し、アメリカの人々の生活や文化を理解し尊重するために努力しようとすることは、国際性育成の観点から重要なことである。さらに、特殊教育の充実を図る努力が実って、1988年に特殊学級設置委員会がつくられ、93年11月に、特殊学級が開設されたことも重要なことであり、アメリカの特殊教育の長所をも取り入れて、特殊教育の成果をあげていくことは、大切な試みといえることができる。

Ⅱ－２－２ 教育課程と教科の目標

1. 教育課程

同校の「学校案内」によると次のようになっている¹⁰⁾。

教科等／学年	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	7 年	8 年	9 年	特殊学級
国 語	9	9	8	7	6	6	6	6	6	5
社 会	—	—	3	3	3	3	4	4	3	—
※ 米 国 社 会	1	1	1	1	1	1	1	1	1	—
算 数・数 学	4	5	5	5	5	5	4	4	5	5
理 科	—	—	3	3	3	3	3	3	4	—
生 活	3	3	—	—	—	—	—	—	—	—

音 楽	2	2	2	2	2	2	2	2	1	2
※図画工作・ 美 術	2	2	2	2	2	2	2	2	1	2
体 育・ 保 健 体 育	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
技 術・家 庭	—	—	—	—	2	2	2	2	2	2
※ 英 語	4	4	4	5	5	5	5	5	5	—
道 徳	1	1	1	1	1	1	1	1	1	—
特 別 活 動	6	5	3	3(1)	2(1)	2(1)	2	2	3(1)	2
日 常 生 活 の 指 導	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5
コ ン ピ ュ ー タ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2
生 活 単 元 学 習	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7
合 計	35	35	35	35	35	35	35	35	35	35

- ・(1)は4, 5, 6年学裁・9年進路の時間を特別活動として計上した。
- ・※の教科は米人教師による英語の授業を行っている。
- ・英語は児童・生徒の経験の違いから能力別に4ないし5階のレベルに分けている。
- ・教科書は各教科とも日本国内で最も広く利用されているものを使用している。

この教科課程には、いくつかの特色を見出すことができる。日本の文部省の学習指導要領に準拠しているが、※のついた「米国社会」「図画工作・美術」「英語」の教科は、アメリカ人教師によって行われている。日本の学校にない教科は、「米国社会」である。この教科はアメリカの私立学校として、州の許可を受けるためには必須とされている。

2. 各教科の目標についての考察

各教科の目標について、国際理解、国際性の育成の観点から、注目すべき要素について簡単なコメントを試みたい¹¹⁾。

(国語について) 自分の考えを論理的に話したり、書いたりする能力の育成のために、アメリ

カに関する教材の充実をはかることは、きわめて重要であり、日本人のこの面の能力は全体的に劣っているので、子どものうちから努力することは大切である。

(社会について) 日本の文化と伝統や政治のしくみを理解し、アメリカさらに世界と日本との関わりについての理解を深めるねらいは、評価できる。

(算数・数学について) 日本の算数・数学の計算方法の違いについて知り、算数・数学に対するアメリカの子どもたちの考え方も知ることができれば、大いに役立つものがあると思われる。

(理科について) アメリカの自然や環境を題材にしたものを取り入れ、日常生活での疑問を解決しようとする態度を育てることは、これからの理科教育を大いに前進させることになる。

(音楽について) アメリカを代表する作曲家や演奏家について知り、その作品を演奏したり、鑑賞することは、音楽の美しさや楽しさを味わう力を育てる点で、子どもの時期における音楽的な発達課題とも言うことができる。

(美術について) アメリカ文化の理解を考えたアメリカ人教師に担当してもらうことで、日本人教師にはないものを得られるかもしれない点で、重要な意味がある。感情・情緒の育成という点で、大事にしたい教科である。

(体育について) 生涯スポーツが一般化しているアメリカ社会を理解し、生涯スポーツやレクリエーションに親しむ意欲を育てる点で有意義なものとなることが期待される。

(技術・家庭について) 技術や家庭生活、社会生活における日米の類似点や相違点を理解し、それぞれの良い面を生活に生かしていく態度を養う点で有意義である。

(米国社会について) 日本の学校にはない科目で、アメリカ史の知識を通じて、アメリカ文化のセンスを理解し、アメリカ人教師に教えてもらうことで、英語の技能をも高めることができる。

(英語について) 文化的に関連するテーマへの学際的アプローチを通して、生徒の英語能力を高める点で有意義である。生きた会話力を身につけ、アメリカの文化と歴史を身近に学ぶことができる点でも意義があると言える。

総じて、諸教科を通してアメリカの文化と社会に身をもって触れることで、自己実現の意欲を高め、国際理解の能力や意欲や態度を学ぶことができる機会をもつことができる。

3. 学校暦と校時程表

次に学校暦と校時程表について見てみると、その概要は以下のようにになっている¹²⁾。

学校暦は、アメリカの一般の学校のように、秋に始まり夏に終わる場合とちがって、日本の学校暦に合わせて、4月に始まり、翌年の3月に終わる3学期制をとっている。

校時程表をみると、朝8時35分からの朝の会に始まり、1校時は40分となっており、7校時まであり、下校の時間は15時45分で、日本の学校の高学年に比べると、早い下校時間となっているが、スクールバスで、一斉に帰るための措置とも言える。特に中等部の段階ではクラブ活動の時間が日本に比べ、短い感もある。

学校行事のうちで目につくのは、日系人墓参会、地域文化交流会、ホームステイ、老人ホー

ム訪問等があり、国際性を育てるよい機会であると言える。

II-2-3 教職員の構成

グリニッチ本校と、ニュージャージー分校における教職員構成は、次の表のとおりである¹³⁾。

教職員構成（人）

教 職 員	G 校	N J 校
日本からの派遣教員	18	7
現 地 日 本 人 教 員	6	1
米 人 教 員	8	5
職 員	6	1
合 計	38	14

表の中で

G校はグリニッチ校

N J校はニュージャージー分校

を意味する。

日本からの派遣教員、現地日本人教員、米人教員と、教職員は混成集団であるので、教職員の共通理解と、協力と協働とがきわめて重要である。教職員をまとめていくのには、校長の指導性も必要になってくる。

校務分掌としては、教務部、生活指導部、特別活動部、文化交流部とがある。文化交流部の存在がユニークである。この他の委員会としては、研究推進委員会、特殊教育委員会、コンピュータ委員会、教育課程編成委員会などがある。

教育のきめては、教員の質にかかっている。校長は日本から派遣され、原則として任期は3年で、日本から派遣された校長以外の教員の任期も3年のようである。外国人教師は91年に就任した者が多いが、中には81年に就任した者もいる。現地日本人教諭の中には75年就任の者もいる。これらをみても、現地の日本人や外国人の教員への依存度が高いことが分かる。

III章 ニュー・ヨーク日本人学校の児童・生徒の国際性に関する調査

III-1 ニュー・ヨーク日本人学校の児童・生徒の学校生活の状況

III-1-1 児童・生徒への質問紙調査の概要

ニュー・ヨーク日本人学校に、現に通っている児童・生徒に対して、国際性に関する質問紙調査を、1997年2月に行なった。対象となったのは、初等部4年(21人)、5年(37人)、6年(43人)の児童合計101名と、中等部1年(46人)、2年(35人)の生徒合計81名、児童・生徒の総

計は182名である。初等部1～3年を調査対象としなかったのは、国際性に関するこの種の質問紙調査に答えるのは無理だと考えたためである。中等部3年生は、調査時には仮卒業しており、残念ながら調査できなかった。

質問紙による調査項目の中には、直接、国際性に関連しないものも含まれているが、以下、国際性に関するものを重点に、調査結果を述べ、それぞれについてコメントを行いたい。

質問 a あなたの好きな科目を二つまで選んで○でかこみなさい。

全体的にみて、体育、図工が好まれている。体育は、初等部4年(小4と略す。以下同じ)で高く、経年的には漸減の傾向がみられる。これに対し、社会科は漸増の傾向がみられる。日本人学校で、日本の中学校や高校への進学に備えているせい、英語の選択率は低かった。しかし後の質問dで「英語をもっと勉強したい」者が多いことからすると、英語の必要性を認めていないわけではない。

質問 b あなたのきらいな科目を二つまで選んで○でかこみなさい。

全体的にみて、数学と英語とをきらいな科目としてあげている者が多い。科目が好きかきらいかは、教師の教育方法や教材の難易度等にも左右されるが、英語がきらいな者が、数学に次いで多いのは、これからの日本人学校の課題の一つと言える。

質問 c あなたは英語が得意ですか。(○でかこみなさい)

英語はコミュニケーションの場合に重要な要素となると考えられる。全体的にみて、英語が「得意」「まあまあ得意」を合わせると、過半数を超えているが、「得意でない」とする者も相当数いることに注意したい。

質問 d あなたは英語をもっと勉強したいですか。

この問いは、英語についての上達意欲をたずねるのがその主旨である。英語をもっと勉強したいという者が、小4から小6にかけて漸減し、中1、中2となるにつれて、上昇している。質問b、c、dをかさね合わせてみると、英語は得意ではないが、学習する必要性をもつようになっている。とくに中1、中2では、経年的に高くなっていることは、高校の学習に備えているとも言えるが、国際性の観点からみて特色として注目すべきである。

質問 e あなたは家で話している言葉は何ですか。

この問いは英語を家庭の中で使っているかどうかを調べようとした。家で話している言葉は、日本語が多いのは予想したとおりであるが、中1では低いが5ヵ年平均13.6%の子どもが、日本語と英語とを使っている点を注目したい。このことは日本国内の家庭ではみられない特色であるので、国際性の観点から注目したい。

質問 f 日本人で仲のよい友だちがいますか。

質問 g アメリカ人で仲のよい友だちがいますか。

友だちに関する2つの質問のうち、特にアメリカの友人をもっているかは国際性を計る上で重要な要素となるといえる。仲の良い友だちがいるかという問いに対して、日本人の友だちが5人以上もいると答えた者が、平均して83.8%いるのに比べ、アメリカ人の友だちがいると答えた者は50.5%である。日本人に比べ、アメリカ人の友だちが得にくいことを示しているが、

別の見方からすると、アメリカ人の友だちを持っている者が50.5%もいるということは、アメリカに住んでいるからこそと考えられる。国際性の視点から注目すべき数字である。

質問h 学校でよく先生と話をしますか。

この質問は、学校の先生方とのコミュニケーションの状況を調べたものである。「する」と「時々する」とを合わせると95.0%になっている。先生の中にはアメリカ人の先生が多く含まれていることは予想できる。「しない」と答えた者が4.9%と少ないが、少数者ながら、先生と話をしない者がいることは問題点といえる。

質問i あなたはアメリカのテレビ番組を見ますか。

アメリカの文化・社会を知る上で、テレビ番組は有力な媒体となる。「よく見る」が平均42.8%、「まあまあ見る」が平均45.7%となっており、全体的にテレビ番組を割合よく見ていると言える。

質問j あなたはアメリカの映画館、美術館、博物館などに行きますか。

アメリカの映画館、美術館、博物館などの娯楽施設や文化施設への接触がどの程度あるかを調べようとした。「よく行く」が平均25.7%、「ときどき行く」が平均65.7%となっており、高い数字を示している。「行かない」が8.6%である。特に「行かない」者が中1になると多いのが目につく点である。しかし全体的にみて、子どもたちは、アメリカ文化に触れる機会が多く、国際性を身につける点で注目すべきである。

質問k 塾に行ったり“ならいごと”（例えばピアノ、バイオリン）をしていますか。

「塾」に行っている者が54.2%と最も高い。これは日本の高校受験を意識している結果を示すものといってよい。以下「英語」25.0%、「スポーツ」24.8%、「音楽」23.5%の順となっている。「英語」を「塾」で習っている場合もあると思われるので、両者の割合を明確に区別しにくい面があるが、学校外のならいごとの領域でも、「英語」の力をつけたい者が相当数いることに注目したい。

質問l 学校にはあなたにとって興味がある授業がありますか。

「多い」が20.2%、「まあまあ多い」が62.7%、両者を合わせると82.9%と、多くの者が学校には興味がある授業があると答えている。理由はこの問いと答えでは明らかではないが、中2で23%近くの者が「少ない」と答えている点は注意を要すると思われる。

質問m アメリカの生活は日本にいたときの生活より楽しいですか。

平均して「たいへん楽しい」が31.5%、「楽しくない」が8.8%に比べ、「どちらとも言えない」が59.2%と最も多い。小5から中2にかけて、「楽しくない」がわずかながら上昇傾向にある点は注意されるべきである。理由を記述式に書いてもらったが、「たいへん楽しい」と答えた者の理由としては、各学年とも「友達がいる」「環境がよい」が多く、逆に「楽しくない」と答えた者の理由としては、各学年とも「友達がいらない」「友達の家が遠い」が多かった。

質問n あなたは卒業したら高校（中学）も今のような日本人学校へ行きたいと思いますか。

初等部を卒業して日本人学校の中等部へ行きたいと思う者は平均して84.8%、小6で88.4%となっているのに対し、中等部を卒業して日本人学校の高校へ行きたいと思う者は、中1で

65.2%、中2で65.7%となっており、平均すると65.5%となっている。

多くの者が初等部から中等部へは進みたいと思っているが、中等部から高校へとなると、母国の高校等へ進む志向が強いと思われる。高校段階のコースはニューヨークの補習授業校にはあるが、ニュー・ヨーク日本人学校には設けられていないので、この質問nは不備であったと思われる。

質問p 学校で楽しいこととか、すばらしいことと思うことを書いて下さい。

この質問には記述式の答で、複数の理由を記入している者がいるが、おおまかに整理すると、(1) 友達と交わり遊ぶ楽しさ、(2) 環境がよい、(3) 授業が楽しい、(4) 先生（この中にはアメリカ人の先生も含んでいる）がよい、(5) 体育・運動、(6) 学校行事（これには修学旅行、遠足、アメリカの学校との交流会等を含む）、(7) 自由・校則がゆるやか、等の順に多い。

それぞれの項目を明確に区別しにくい面がある。例えば「授業が楽しい」と「先生がよい」とは結びついている面がある。また「環境がよい」ということの中には、広い運動場も含まれており、それによってのびのびと体育や遊びや、運動に励むことができる。「いじめがない」をあげている者が2人と少ないが、仲のよい友達に恵まれておれば、いじめは少なくなるのは当然で、いじめが多く起こっている感じがある日本の国内の学校と比べると、日本人学校の優れた人間関係に感心させられ、このことは注目すべきことである。

質問q アメリカに生活していて、良いと思うことを書いて下さい。

自由記述式で、解答してもらったところ、複数の理由を記入している者がいるが、おおまかに整理すると、合計232件のうちで、(1)土地が広い 77、(2)新しい経験が得られる 62、(3)物が便利である 36、(4)英語が学べる 27、(5)マナーがよい 17、(6)自由である 16、(7)テレビがおもしろい 4、等の順になっている。

国際性の視点からみると、(2)「新しい経験が得られる」ことは、一種のフロンティア精神を学べる点で大いに評価される。(4)「英語が学べる」ことも、コミュニケーションの重要な要素としての英語の能力の重要性を認識している点で、高く評価される。

Ⅲ－１－２ 教師への面接調査

1996年9月に、私がニュー・ヨーク日本人学校を訪問した際、校長、教頭、授業担当教員、特にO先生の意見を聞く機会を得たが、これらを総合してみると、生徒の状況について、子どもたちの面接や詳しい質問紙調査を裏づけるような重要な特色を知ることができた。项目的にまとめると次のようになる。

1. 学校生活を生徒は楽しんでいる者が多いが、スポーツや遊びがバス通学の都合もあり、学校ではやりにくい。
2. 日本の学校のように掃除を生徒にはさせていない。
3. 家と家とが離れていて、友だちを得にくい事情があるが、アメリカ人の友だちを得ることで、広い視野をもち、どのような人種の人がいっても、抵抗を感じないで、コミュニケーションができるようになっている者が多い。

4. 授業によっては能力別編成をとっているが、日本でみられるような抵抗感はない。
5. 現地校から変わってくる生徒がかなりいるが、その理由の多くは、日本にまもなく帰るから、特に日本の高校受験に備え、その準備をしたいとするものである。

Ⅲ-2 ニュー・ヨーク日本人学校の児童・生徒の国際性の指標と評価

Ⅲ-2-1 国際性の指標

ニュー・ヨーク日本人学校の児童・生徒の生活状況についての質問の中、国際性を知る上で最も重要な指標となるものは、質問m「アメリカの生活は日本にいたときの生活より楽しいですか」、つまりアメリカ生活の満足度についての児童・生徒の反応である。

質問mに対して、「たいへん楽しい」と答えた者と「楽しくない」と答えた者に分けて、それぞれ他の要素との相関をみてみよう。この場合、要素として取り上げたのは、相関をみる上で比較的重要と思われる次の7つの項目である。

- (1) 滞米年数
- (2) 質問c「あなたは英語が得意ですか。」
 - ① 得意 ② まあまあ得意 ③ 得意でない
- (3) 質問d「あなたは英語をもっと勉強したいですか。」
 - ① したい ② どちらともいえない ③ したくない
- (4) 質問e「あなたは家で話している言葉は何ですか。」
 - ① 日本語 ② 英語 ③ 日本語と英語
- (5) 質問g「アメリカ人で仲の良い友だちがいますか。」
 - ① いる(人数) ② いない
- (6) 質問i「あなたはアメリカのテレビ番組を見ますか」
 - ① よく見る ② まあまあ見る ③ 見ない
- (7) 質問j「あなたはアメリカの映画館、美術館、博物館などに行きますか。」
 - ① よく行く ② ときどき行く ③ 行かない

Ⅲ-2-2 初等部児童の状況

1. 初等部4年生の状況

「たいへん楽しい」と答えた者 4年生21名中6名

個人 番号	滞米年数	質問 c	d	e	g	i	j
		英語の得意度	英語の上達意欲	家での会話	アメリカ人の友	テレビの視聴	文化施設へ
		1.得意 2.まあまあ 3.得意ではない	1.したい 2.どちらとも言えない 3.したくない	1.日本語 2.英語 3.日本語と英語	1.いる (人) 2.いない	1.よく見る 2.まあまあ見る 3.見ない	1.よく行く 2.ときどき行く 3.行かない
4-21	0~2	3	1	1	1 1人	1	1
4-15	2~4	2	1	1	1 3人	1	2
4-10	2~4	3	2	1	2	1	2
4-7	2~4	3	1	1	1 15人	1	2
4-22	4~6	1	1	3	1 5人	1	3
4-18	4~6	2	1	3	1 7人	1	1

「楽しくない」と答えた者 4年生21名中2名

個人 番号	滞米年数	質問 c	d	e	g	i	j
4-05	4~6	2	2	1		1	2
4-14	0~2	3	2	1		2	3

2. 初等部5年生の状況

「たいへん楽しい」と答えた者 5年生37名中12名

個人 番号	滞米年数	質問 c	d	e	g	i	j
5-54	0~2	2	1	1	1 2人	2	3
5-56	0~2	3	1	1	1 2人	2	2
5-55	2~4	1	1	1	1 3人	2	2
5-63	0~2	3	1	3	2	1	2
5-66	2~4	2	2	1	2	1	2
5-73	4~6	2	1	3	1 3人	1	2
5-76	6~8	3	3	1	2	2	2
5-78	6~8	3	3	3	1 5人	1	1
5-82	4~6	2	2	3	1 2人	1	2
5-83	2~4	3	2	1	2	3	2
5-87	4~6	2	2	3	1 10人	1	2
5-89	0~2	2	1	1	1 2人	2	2

「楽しくない」と答えた者 5年生37名中2名

個人番号	滞米年数	質問 c	d	e	g	i	j
5-59	2～4	2	2	3	1 30人	2	2
5-64	0～2	3	2	1	1 1人	3	3

3. 初等部6年生の状況

「たいへん楽しい」と答えた者 6年生43名中10名

個人番号	滞米年数	質問 c	d	e	g	i	j
6-92	4～6	1	2	1	1 7人	1	2
6-98	2～4	2	2	1	1 2人	2	2
6-102	0～2	1	3	1	2	2	2
6-104	0～2	3	1	1	2	1	2
6-105	4～6	2	3	1	2	2	2
6-123	6～8	2	3	1	1	1	2
6-127	2～4	1	2	1	1	1	1
6-128	6～8	1	1	3	1 8人	1	1
6-130	6～8	1	1	3	1 50人	1	1
6-131	不明	1	1	1	1 40人	1	1

「楽しくない」と答えた者 6年生43名中3名

個人番号	滞米年数	質問 c	d	e	g	i	j
6-108	2～4	3	3	1	2	3	3
6-113	4～6	3	2	1	2	2	2
6-126	0～2	3	3	1	2	3	2

4. 初等部児童の国際性についての考察

初等部4年～6年までを全体的にみた場合、言えることは次のことである。

(1) アメリカ生活の満足度

アメリカでの生活を日本にいた時の生活より楽しいと答えた者は、4年生で21名中6名 28.5%、5年生で37名中12名 32.4%、6年生で43名中10名で23.2%、3ヵ年を平均すると28.0%である。「楽しくない」と答えた者は、4年生で21名中2名 0.09%、5年生で37名中2名 0.05%、6年生で43名中3名 0.07%で、3年平均では0.07%と数は少ない。総じて「楽しい」と答えた者が相当数いることは、子どもたちの国際性が高いことを評価できるといえる。

(2) 英語の上達意欲

英語は現在のところ得意であるとは言えないとする者が多いが、英語の上達意欲はかな

り高いと評価できる。

(3) 家での会話

家での会話で、「楽しい」と答えた者に、日本語と英語との両方を用いている者がかなり多いことは、注意すべきであると思われる。

(4) アメリカ生活の楽しさと友だちとの関係

アメリカ人の仲のよい友だちが多いことが、「楽しい」と思う重要な要因となっていることにも注意したい。

(5) アメリカ生活の楽しさとテレビ視聴

テレビをよく見ることについては、テレビの番組の質を問題とする必要もあるが、アメリカ人の生活に身近に触れる点で有効である。テレビの番組を見ることでは「アメリカ生活が楽しい」と答えた者と「アメリカ生活が楽しくない」と答えた者との間には、著しい違いはみられない。

(6) アメリカ生活の楽しさと文化施設

映画館、美術館、博物館への訪問の面でみると、「楽しい」と答えた者が「楽しくない」と答えた者に比べ、頻度が高いと言える。娯楽施設や文化施設との接触の重要性が指摘できる。

(7) 生活の楽しさと親の態度

親の態度の影響をみると「楽しい」と答えた者の両親の方が、「楽しくない」と答えた者の両親と比べ、アメリカ人との交際も多く、それを楽しんでおり、アメリカ文化・社会の評価も高く、アメリカ人の生活態度の評価も高く、これが子どもたちに影響し、相関が高くなっていると思われる。

(8) 生活の楽しさと滞米年数との相関

「楽しい」と答えた者と「楽しくない」と答えた者の比をみると

滞米年数	小4 (21名中)	小5 (37名中)	小6 (43名中)
0～2年	1：1	4：1	2：1
2～4年	3：0	3：1	2：1
4～6年	2：1	3：0	2：0
6～8年	0：0	2：0	3：0

「アメリカ生活が楽しい」と答えた者と「アメリカ生活が楽しくない」と答えた者と、滞米年数との関係をみると、滞米年数が長くなるほど、「楽しい」とする者が増えていると言える。そのことは逆に言えば、滞在年数が少ない場合の子どもへの配慮や指導に、よりいっそうの注意が必要である。

Ⅲ-2-3 中等部生徒の状況

1. 中等部1年生(7年生)の状況

「たいへん楽しい」と答えた者 7年生46名中14名

個人 番号	滞米年数	質問 c	d	e	g	i	j
7-50	0~2	3	2	1	2	1	1
7-01	2~4	3	2	1	2	2	1
7-07	2~4	2	1	1	1 2人	1	1
7-19	2~4	3	1	1	2	2	2
7-22	2~4	2	2	1	1 5人	1	2
7-24	2~4	2	1	1	1 2人	1	2
7-30	2~4	3	1	1	2	2	3
7-36	2~4	2	1	1	2	1	1
7-42	2~4	2	1	1	1 4人	3	2
7-55	2~4	3	2	1	2	1	2
7-49	4~6	3	2	1	2	2	1
7-06	6~8	1	2	1	1 5人	2	2
7-20	6~8	2	2	1	1 5人	3	3
7-04	8年以上	2	1	3	1 5人	3	1

「楽しくない」と答えた者 7年生46名中4名

個人 番号	滞米年数	質問 c	d	e	g	i	j
7-45	0~2	3	2	1	2	2	3
7-05	0~2	3	1	1	2	2	2
7-21	2~4	3	1	1	2	3	2
7-16	4~6	2	1	1	1	2	2

2. 中等部2年生(8年生)の状況

「たいへん楽しい」と答えた者 8年生35名中12名

個人 番号	滞米年数	質問 c	d	e	g	i	j
8-97	0~2	3	1	1	2	2	2
8-106	0~2	2	1	1	2	1	2
8-119	0~2	3	1	1	2	2	3
8-066	0~2	3	1	1	1 2人	1	2
8-073	2~4	2	1	1	1	1	1
8-105	2~4	3	1	1	1 5人	1	1
8-074	2~4	2	1	1	2	2	2
8-070	4~6	3	1	3	1 1人	2	2
8-095	4~6	2	1	3	1 2人	1	1
8-075	4~6	2	1	3	2	1	2
8-118	8以上	2	1	1	2	2	2
8-072	8以上	2	1	1	1 4人	2	1

「楽しくない」と答えた者 中等部2年(8年生)46名中4名

個人番号	滞米年数	質問c	d	e	g	i	j
8-82	0～2	3	3	1	2	3	2
8-88	0～2	3	1	1	1 3人	2	2
8-109	0～2	3	2	1	2	2	2
8-112	2～4	3	2	1	2	2	2

3. 中等部生徒の国際性についての考察

中等部1年と2年を総合してみると、「たいへん楽しい」という答えをしている者と、「楽しくない」という答えをしている者とを左右している大きな違いは、次の点にあると思われる。

(1) 生活の楽しさと友だち

仲のよい友だちがいるかいないかによって違っている。「楽しい」と答えている者には「楽しくない」と答えている者に比べて、友だちに恵まれている。

(2) 生活の楽しさと母親の態度

アメリカ人との交際は、数が限られていても、楽しいと感じている親、特に母親の積極的態度が子どもたちの「楽しい」評価との相関が高いように思われる。

(3) 生活の楽しさと文化・社会に対する両親の態度

両親のアメリカの文化・社会の評価が高いかどうか、子どもの「楽しい」生活と相関が高いとみてよい。すなわちアメリカの文化・社会の評価が高い親をもつ場合、「楽しい」と答える子どもの態度に相関度が高いように思われる。

(4) アメリカ生活の楽しさと滞米年数との相関

先に掲げた表の中から両者の関係を整理して表記すると次のようになる。

「楽しい」と答えた者と「楽しくない」と答えた者の比をみると、

滞米年数	中1 (46名中)	中2 (35名中)
0～2年	1：2	4：3
2～4年	9：1	3：1
4～6年	1：1	3：0
6～8年	2：0	0：0
8年以上	1：0	2：0

滞米年数が長いほど、アメリカ生活の満足度は高くなっている。0～2年の滞米年数の子どもの場合には、いっそうの注意と指導が必要である。

(5) 子どもがアメリカ生活が楽しくない場合の、親の側の共通要因

初等部と中等部とを含めてみた場合、小4～中2までの子どもが「アメリカ生活が楽しくない」と言っている者は、全体からみれば数は少ない。しかし小4の2人、小5の2人、小6の3人、中1の4人、中2の4人に共通している要因としては、親の態度の

うち、アメリカ人との交際が、両親とも消極的な場合に多くみられることが注目されるべきである。この要因が唯一の決め手となる要因ではないかもしれないが、少なくとも重要な要因の1つであることを示しているように考えられる。

[附 記]

質問紙調査への回答者の在籍者に占める割合は、下記のとおりになっている。

	回答者数	在籍者数	比 率
小 4	21名	23名	91.3%
小 5	37名	54名	68.5%
小 6	43名	45名	95.6%
中 1	46名	55名	83.6%
中 2	35名	53名	66.0%
計	182名	230名	79.1%

終 章

日本が、これからの世界で、自らの文化を発展させ、人類の共生のための重要な役割を果たしていくには、国際化していくことが重要である。国際化が必要とし、要請する能力・価値観や態度を国際性と捉え、その育成のためにどうしたらよいかを考えることが重要である。しかし国際性をどう捉え、育成の方策を考えるには、既存の具体的資料が得られていない。

そこで私は、この論文で、国際性の問題について理論的に考察し、さらに実証的な資料を得て、この問題を検討しようとした。そのために、海外子女教育の場において、若い世代がどのように国際性を身につけているかを調べることにした。もちろん国際理解教育は、日本でも戦後、力を入れられてきたが、海外にあって与えられた教育環境の中で国際理解を学び、教養を深めている若い世代の実態がどうなっているかを調べる必要があることを感じた。

実証的調査の前提というか、理論の枠組とすべきものが少なくとも4つある。

- ① 概念的に国際化と国際性との関係を明らかにすること。
- ② 日本の国際化を妨げている要因を分析しておくこと。
- ③ 海外にいる子どもにとって、家庭が重要な環境となり、教育の担い手になるから、彼らを持ちがちな日本の伝統、慣習、思考様式の分析をしておくこと。
- ④ ニュー・ヨーク日本人学校の調査をするためには、アメリカの教育環境やインスティテューション (institution) の特質を明らかにしておくこと。

そこで基礎的な作業として文献研究を行い、これらの分析をした後、日本人学校の調査を行った。この種の調査は、対象校からすると数多く来ると思われ、授業の妨げになることを恐れる傾向もある。種々の都合で今回は質問紙調査は、ニュー・ヨーク日本人学校とその校舎の一部を使っている補習授業校 (ウェストチェスター校) 1校とに限らざるを得なかったが、調査に応じていただいた関係校には謝意を表したい。

この論文では、ニュー・ヨーク日本人学校で学ぶ子どもたちの実態調査を重点において検討してきた。その結果を総合的にまとめると次のように言えると思う。

各調査項目についての単純集計にとどまることなく、国際性の指標となるものと、それらの相互関係を考えることが重要である。

この場合、国際性が高いか低いかの指標の中心として、外国生活への適応度があることが国際化が要求する重要な指標の一つと考えた。国際化のために必要な能力は、英語の能力、異質な文化と共生する価値観・態度を含んでいる。そこでアメリカで生活している日本の子どもの場合、滞米年数、英語の能力、英語の上達意欲、家庭での会話、アメリカ人の友人関係、マスメディアの代表的な媒体としてのテレビの視聴、娯楽施設・文化施設への接触度などとの相関をみるのが必要であると考えた。

また子どもたちへの親の態度の影響力をも考え、外国人との交際を楽しんでいるか、アメリカの文化・社会をどう評価しているか、アメリカ人の生活態度をいかに評価しているかなどの要素を関連づけて考察した。調査研究の結果を簡潔にまとめると次のようになる。

(1) 滞米年数

滞米年数が相対的に長い者に、アメリカ生活への適応度が高い傾向がみられ、「アメリカ生活が楽しくない」と答えた者に、滞米年数が2ヵ月とか短期間の場合に多くみられた。滞米年数が短い者に対しては、それに応じた教育の工夫をしていく必要がある。

(2) 英語の能力

現地校に行っている者が、日本人学校に行っている者よりも、英語の得意度・上達意欲が格段に高いと言える。これら現地校での英語のプラクティスが多いためと考えられる。

日本人学校の児童・生徒が英語が得意でないと思う者が多いのは、日本に帰った時の上級学校の入試を意識したり、学校の授業や家庭内の会話が日本語を使う場合が多いことによっていると思われる。しかし「アメリカの生活を楽しんでいる」と答えた者で、現在は英語は得意ではないが、英語の上達意欲が高いことが示されている。英語の上達意欲をもつことはアメリカ生活の適応度を高めるのに必要であるとともに、国際性の観点からみて、大切なことである。

(3) アメリカの友人

アメリカ生活が大変楽しいと答えた者は、日本人の友人とともに、あるいはそれ以上にアメリカの友人が多いことが分かった。逆に「アメリカ生活が楽しくない」と答えた者は、友人特にアメリカ人の友人が少ないか、いない者が多いことが分かった。

このことから言えることは、国際性を高めていくには、現地のアメリカ人や外国人の友人を、できるだけ多くもつことが大切である。

(4) テレビの視聴

アメリカのテレビ番組には質的にみてどうかと思われる番組もあるが、調査結果をみると、アメリカ生活で「大変楽しい」と答えた者にテレビ視聴率が高く、「楽しくない」と答えた者に視聴率が比較的低いことが明らかになった。

テレビの視聴ということに関して言えば、親の助言も必要な面があるが、アメリカの生活に

よい意味で慣れるためにも重視すべき要因である。

(5) 文化施設への接触

アメリカ生活への適応度が高い者に、博物館、美術館等への訪問・見学の度数が多く、逆に、適応度が低い者に、その度数が少ないことが分かった。家庭の人も学校関係者も、これら施設への訪問・見学を奨励し、適切な助言、指導を行うことが大切であると思われる。

(6) 親の態度

「アメリカ生活が大変楽しい」、と答えた子どもたちの親の態度はどうかを調べたところ、外国人との交際については、父親の方が一般的に「楽しい」と答える割合は多い。

「楽しくない」と答えた子どもの場合、特に母親の態度が外国人との交際に消極的であることが関連していると考えられる。

また、「アメリカの文化・社会」及び「アメリカ人の生活態度」についての両親の評価が低い場合も、子どものアメリカ生活への適応度にマイナスの相関や影響を与えていることが分かった。子どもの国際性を高めていくには、両親のこれらの面での態度の向上が不可欠である。

その他、ニュー・ヨーク日本人学校の場合「アメリカ生活が大変楽しい」と答えた理由の中で注目されるのは、「環境がよい」という要因をあげている者が多かった。私もグリニッチ本校を訪問して、環境のすばらしさに感心したが、学校はやはり環境のよさが重要で、居ながらに子どもたちが自然に親しみ、自然を大事にする気持ちをもつことは、これからの国際性の育成にとっても大切である。

「アメリカ生活が楽しくない」、ということの要因に、日本でしばしばみられる「いじめ」という要因があげられていないことも注目すべきことである。アメリカでは、銃社会や人種差別、性差別が話題になることが多いが、これらの危害や影響から免れているのは、学校関係者の努力が大きいことを示している。

今回の日本人学校の調査では、小4から中2までを対象とした。中3は仮卒業で調査をすることはできなかった。ニュー・ヨーク日本人学校には高等部はないが、ウェストチェスター補習授業校では高等部があり、現地の学校に通っている高1、17名、高2、8名に対して質問紙調査を行うことができた。その中で特に注目したいのは次の点である。

高1で「アメリカ生活は日本にいた時より楽しい」と答えた者は17名中3名、「楽しくない」と答えた者は17名中1名で、他の13名は「どちらとも言えない」と答えた。高2では、8名のうち全員が「どちらとも言えない」と答えている。

ウェストチェスター校では、高校生に面接調査の機会はなかった。シカゴの補習授業校に対しては質問紙調査はできなかったが、シカゴの日本人学校を1996年9月に訪問した際、補習授業校の高校3年の1人の生徒に面接調査を行うことができた。それに関して特に記したいと思ったのは、補習授業校の高校生徒の意見としては傾聴に値するものがあると思ったからである。その際の面接調査のポイントとなるところを5点あげてみよう。

- ① これまでの生活で、積極的に自分の意見を言い、英語でアメリカの生徒に話しかけるようになった。

- ② 内面の生活を考えるようになった。
- ③ 自分の意見を大切にしたいという気持ちをもつようになった。
- ④ 全体を一度みて、自分の考えをみて、それから発言をするようになった。
- ⑤ こちらの生活体験を生かして、大学生活が送れるようにしたい。

私はこの意見は、国際性の育成という観点からみて、非常に重要であると思ったし、海外子女教育の成果があがっていると感じた。それとともにこの体験が、日本で抑圧されることなく、生かされることが必要であると考えた。

ライシャワーが述べたように「世界の相互依存の深さを学び、世界の多様性を『人間の目』で知ってくることが重要であり、それには世界を丸ごと自然に呼吸してきた帰国子女の経験が、かけがえのない価値をもっている」。(「日本の国際化」, Pp.451～452)

小学生、中学生の場合も海外での価値ある経験が生かされるように、日本の教育の場で真剣に考えていくことが大切である。

総括的に言えば、文化は国民の教養、芸術、文学、科学技術、言語などの総称として用いられている。その中でも共通の基礎となるものとして言語の能力の形成が若い世代には重要である。特に国際性の育成のためには異文化を理解し、外国の人との言語的コミュニケーションを行う能力が大切である。しかし国民の多くが英語が上手になることは不可能であるから、国際性を高めることはできないとは言えない。適切な読書を通じ、また学校の教師のすぐれた指導によっても異文化を理解し、国際性をかなり高めることはできる。そのために若い世代は、いっそう努力する必要がある。

それと共に前に述べたことがあるが、自国文化の長所を理解し、他国の文化に建設的に接し、両者に一定の距離を保ちながら、両者の長短を客観的に省察し、国際化が必要とする能力・価値観・態度、言い換えれば、自分とは異質の文化や民族と共生していくことができる能力や価値観や態度を育成することが大切であると考えた。

追 記

ニュー・ヨーク日本人学校卒業生の国際性の追跡調査

ニュー・ヨーク日本人学校の卒業生で、日本の高等学校に入って来ている者について、国際性すなわち国際化が必要とする能力・価値観・態度がどうなっているかについて調査し、日本人学校の果たしている役割や意義について検討してみようと思った。

しかしプライバシーの保護を理由に調査に応じない学校があったが、東京の青山学院高等部にたずねたところ、調査に応ずるということであった。高等部の先生と電話で話し合った結果、調査は質問紙によるものがよい、時期は6月末までに終えるようにということであった。

ニュー・ヨーク日本人学校の卒業生は数が限定されていることと、その全員の子どもと親が質問紙に応じてくれるとは限らなかったが、5名の子どもとその親からの回答を得た。5名という数は調査対象の数としては限られているが、何しろニュー・ヨーク日本人学校の卒業生は、

日本全国に散らばっており、5名だけでも調査できたことは、意味のあることと考える。

次に調査の結果を考察してみよう。

ニュー・ヨーク日本人学校の在学年数については、4年という者も1名あったが、それを含めて平均2年であった。

帰国後の年数については、3年が1名あったが、あとの4名は1年であった。

帰国後、日本の生活の適応については、「問題なし」が3名、「苦勞した者」が2名となっている。苦勞した理由としては、「学校になじめなかった者」1名、「地域社会になじめなかった者」1名となっている。

好きな科目、日本の高校とアメリカで好きだった科目の異動を見てみると、日本の高校で好きな2科目のうち、英語をあげている者が5名中4名いるが、アメリカの中学で好きだった科目として英語をあげている者はいない。しかし2科目のうちの他の1科目、音楽や体育はアメリカの時の好きな科目の1つにあげられている。日本の高校で英語を好きな科目としてあげている者が多いのは、国際性からみてプラス傾向とみてよい。

「帰国後、英語の学習に励んでいるか」についてみると、全員「ふつう」と答えている。好きな科目として英語をあげている者が多かったが、特に学習に励んでいるとは言えない傾向がみられた。その理由が何かについては明確に分かりにくい、他の教科の学習が忙しいせいとも思われる。またアメリカ生活では英語は必要だが、日本の生活では日本語で不自由を感じないことも理由と考えられる。

「家の中での英会話」については、アメリカでは「時々あった」が、日本では「ない」という傾向がみられた。

「アメリカの友だちとの交流」についてみると、交流がない者が多いが、皆無ではなく、1人だけ交流を続けている。5人すべてが、日本での友人が多くおり、他から孤立している者がいない点で意味がある。日本にいる外国人の友だちがいる者が皆無ではなく、5人中2人あることは注目してよい点である。

「学校でクラスの人たちにアメリカの体験を話す機会」については、5人すべてが「時々あった」と答えており、体験を語る機会があったことは、国際化の観点からみて評価されてよいことである。

「アメリカ映画を英語で見ることがあるか」については、テレビや映画館で「しばしばある」と答えており、アメリカ文化との接触を積極的に行っていることがわかる。

アメリカから帰って、日本での生活をしてみての感想を聞いたところ、多くの者が「公共交通機関が便利」と答えており、アメリカでのこの点の不便さを感じていたことの反映とみられる。

アメリカから帰って日本での生活において、「いやな思いをしたこと」についてみると、「あった」と答えた者が多く、人間関係や部活で経験しており、この点は帰国生徒の受け入れ校でも留意すべきことである。

全員が将来、可能ならばアメリカで暮らしたいと思っており、アメリカへの親近感をもって

いると言える。

「卒業してからの進路としてアメリカの大学を選ぶか」については、5人中3人が希望していることは、アメリカの大学への関心が比較的高いことを示している。

「価値観」についてみると、5人とも分かれており、多様化しているが、個人志向と集団志向とが、あい半ばしている¹⁴⁾。

「日本での生活での楽しいこと」として、「車がなくても行きたい所に行ける」と答えている者が多く、アメリカで行動の制約があったことを示している。

「アメリカでのよい思い出」としては、多くの者が外国人とのふれあいや、自由に過ごせたことをあげている。特に全員がニュー・ヨーク日本人学校のよさを高く評価している。

「アメリカでの生活でいやな思い出」としては、多くの者が英語が話せない時に、からかわれたり、人種差別を受けたことをあげている。

「将来の夢」についてみると、多くの者が外国での活動や海外経験を生かせる仕事をしたいことをあげ、国際的視野をもっているといえる。1人の生徒が「ハワイで過ごし、幸せな老後をおくりたい」と答えているが、アメリカ生活をした若者のバラ色の夢というべきかもしれない。

総括的にみると、英語を好きな教科としてあげ、他から孤立せず、友人関係にプラス志向であり、学校でもアメリカ生活体験を隠すことなく開放的であり、映画やTVを通して、アメリカ文化に接触しており、全員が将来可能ならば、アメリカで暮らしたいと思っており、アメリカへの親近感をもっている。特にアメリカの大学へ進学したいと答えた者が相当数いることは、アメリカの大学への関心が高いことを示している。外国の人とのふれあいを大切にしており、将来の夢として外国、特にアメリカで活動できることを考えている点など、国際性の視点からしてプラス志向を育んでいることが言える。

ニュー・ヨーク日本人学校についての評価が生徒にも、その親たちにもきわめて高いことは、ニュー・ヨーク日本人学校の優秀性を示すものと言える¹⁵⁾。同学校のカリキュラム、教師の熱意、学校の自然環境のすばらしさなど、私の見聞からしても、今後の同校の存在意義が高いことを示しているとともに、そこに学んだ生徒たちに、よい思い出を残し、その後の国際性の育成の重要な基盤になっていることがわかる。

注

1) E. O. ライシャワー・納谷祐二・小林ひろみ 1989 日本の国際化——ライシャワーとの対話 文芸春秋社

2) 同上 Pp.289-307

3) 同上 P.332

4) 同上 Pp.451-452

5) 国際化の理論的考察としては、下記参照

小林哲也 1995 国際化と教育 放送大学教育振興会 P.10

黒柳晴夫 1995 生涯学習と国際教育 田浦武雄(編)現代教育入門 福村出版 P.142

価値観・価値志向の理論的考察としては、下記参照

- Kluckhohn, C. K. 1951 Values and Value Orientations in the Theory of Action in T. Parsons and E. A. Shils (Eds.) *Toward a General Theory of Action* Harvard University Press P.390
- 島原宣男 1979 通過儀礼としての大学入試 田浦武雄(編) 教育人類学 福村出版 Pp.103-109.
- 田浦武雄 1967 教育的価値論 福村出版 Pp.104-110
- 6) 天野郁夫 1978 アメリカ——平等と競争の国 麻生 誠・潮木守一(編) ヨーロッパ・アメリカ・日本の教育風土 有斐閣 Pp.42-51
- 7) 補習授業校についてはこの論文では検討しなかったが、ニューヨーク補習授業校(The Japanese Educational Institute of New York)は、1992年から次の3校、すなわち、ロングアイランド補習授業校(The Japanese Weekend School of Long Island)、ウェストチェスター補習授業校(The Japanese Weekend School of Westchester)、ニュージャージー補習授業校(The Japanese Weekend School of New Jersey)に分かれている。補習授業校の児童・生徒は、小1から高3までで、月曜日から金曜日まで、現地校や国際学校などに通学し、土曜日に補習授業校で日本の教科書を主教材として学習する生活を送っている。
- 8) The Japanese School of New York 1995 *An Illustrated History A Celebration of 20 Years*. Pp.3-17
- 9) ニュー・ヨーク日本人学校 1995 学校要覧 Pp.7-13
- 10) ニュー・ヨーク日本人学校 1995 学校案内 P.3
- 11) 同 上 学校要覧 Pp.10-11
- 12) 同 上 学校案内 P.3
- 13) 同 上 P.3
- 14) 価値観についての質問は下記の通りである。
- 次の価値観のうち、どれが自分に最もびつたりしますか。
- (1) 自分の思うとおりにやるのがよい。
- (2) 自分の動機が正しければよい。
- (3) 自分の行動の結果がよければよい。
- (4) 家族や集団のきまりに従うのがよい。
- (5) 多くの人々の合意を尊重するのがよい。
- (6) その他(具体的に)
- 15) ニュー・ヨーク日本人学校からの帰国生徒の親の同校に対する評価は次の通りである。
- (1) 子どもたちが楽しく学べたように見受ける。アメリカから日本に戻る上で、ソフトランディングの助けになった。アメリカ教材と日本教材の両方を学び、アメリカ的なものも維持しながら、日本への適合準備にもなった。
- (2) 少人数で先生方の心配りが細やかであり、友達関係、環境もすべて質がよく、充実したものであった。

参考文献

- 東 洋 1994 日本人のしつけと教育 東京大学出版会
- 異文化間教育学会 1987-1996 異文化間教育1号-10号 アカデミア出版会
- 岡田光世 1993 ニューヨーク日本人教育事情(岩波新書) 岩波書店
- 梶田正己 1997 異文化に育つ日本の子ども(中公新書) 中央公論社
- 加藤幸次 1989 開かれた日本人学校の創造 石附 実・鈴木正幸(編) 現代日本の教育と国際化 福村出版 Pp.98-127
- 久世妙子・蔭山英順・島原宣男 1984 ほめて育てる 有斐閣
- 小林哲也 1981 海外子女教育・帰国子女教育 有斐閣

- 佐藤郡衛 1997 海外・帰国子女教育の再構築 玉川大学出版部
- 篠田有子 1984 母と子のアメリカ (中公新書) 中央公論社
- 田浦加津子 1993 ブルックリンの熱い日々 丸善名古屋出版サービスセンター
- 田浦武雄 1990 改訂版教育学概論 放送大学教育振興会
- 田浦武雄 (編) 1994 アメリカ教育の文化的構造 名古屋大学出版会
- 恒吉僚子 1992 人間関係の日米比較 (中公新書) 中央公論社
- 土居健郎 1971 甘えの構造 弘文堂
- 中西 晃 (編) 1993 国際教育論 創友社
- 中根千枝 1967 タテ社会の人間関係 講談社
- 納谷祐二・小林ひろみ 1993 ライシャワーの遺言 講談社
- ツァーカス, ジェニファー 河野守夫 1980 アメリカの日本人生徒たち 東京書籍
- 箕浦康子 1991 子供の異文化体験 思索社
- 文部省教育助成局海外子女教育課 1997 海外子女教育の現状